

日本人のインディアン像

—— その 1. 徳川時代のインディアン像 ——

はじめに

1983年に拙著『アメリカ・インディアン歴史』を書いたとき、私は1970年代からここ10余年間、わが国でインディアンに関する情報が以前と比べ飛躍的に増加したにもかかわらず、われわれ日本人が抱くインディアン像はあまり変わっていないのではないか、という疑問を述べた。そのインディアン像とは、裸で森林や平原に住み、野獣を狩り、白人を襲う「無知」で「未開」な「野蛮人」であり、それゆえに「文明」によって滅ばされた過去の人びと、というものである。

本稿は、このようなインディアン像が、われわれの間に定着するにいたった過程を歴史的に追求することを目的とする。それは、日本人の対外認識、とりわけ米国認識というより大きな問題の一部をなすが、ここではそれを視野に入れつつ主としてインディアン像に焦点を絞り、時期も徳川時代に限って検討することにしたい。スペースの関係上、明治期以降については別稿に譲りたい。

1. ペリー来航以前のインディアン像——西川如見、新井白石、箕作省吾

わが国でアメリカ大陸の存在に最初にふれた書物は、宝永八（1708）年に刊行された西川如見『増補華夷通商考』5巻5冊であろう。その巻之五の終りに「日本ノ東ニ当レル大洲ヲ亜墨利加ト云。諸国左ノ如シ」として10頁ばかりの記述がある。そこではベルウ国、ハライシル、チイカなど、それぞれペルー、ブラジル、チリーに当る南米の諸地域や、モシコ、ノウハフランス、カリフルシア、イスパニョウル、クウバなど、それぞれメキシコ、ニューフランス、カリフォルニア、イスパニョラ、キューバに当る北米やカリブ海域の地域についての記述があるほか、キビラ、タゼエル、タルガなど不詳の地域もある。そのなかから原住民にふれた記述を拾ってみるとベルウ国では「人間ノ風俗最モ賤シ」、ハライシルでは「其地気最モ厚ク、奇異ノ鳥獸多ク、人ヨク弓ヲ射ル。人物男子ハ多クハ裸ニテ、女人ハ常ニ乱髪ニテ身ヲ蔽ヘリ。国ニ米麦ナシ。草ノ根ヲ晒シテ乾シ粉ニシテ餅ニ作りテ朝夕ノ食トス。国主ナク文字ナシ。好ンデ人ノ肉ヲ喰フ」、チカイでは「人の長一丈程ニテ遍身毛アリ」、モシコでは「昔ハ此ノ国ノ土民、人ヲ殺シテ食シ、又魔神ヲ祭レリ。……野人ハ獐惡ニシテ、走ルコト馬ニモ勝レリ。善ク弓ヲ射ル。喜ンデ人ノ肉ヲ喰フトゾ」、タゼエルでは「凡ソ寒国ニテ人民勇強ニ合戦ヲ好ミ、人ノ肉ヲ食フ事ヲ嗜ミ、寧惡偏卑ノ国ト云フ」とある。(1)

このような「人肉ヲ食フ」「獐惡」な人種、「魔神ヲ祭ル」異教徒というインディアン像には、当然のことながら、如見が依拠した蘭書の著者たちの、米大陸とその住民に対する16・17世紀のヨーロッパ的偏見が色濃く反映されている。しかも、その偏見に迎合しそれを助長するような、猟奇的な誇大な描写が散見される。その反面、スペイン人の征服者たちが眼にし自らの手で破壊したアステカやインカの都市文明や、その基礎となった農耕定住村落の人びとの姿は、なぜか伝えられていない。

如見のこの『増補華夷通商考』が「江戸時代を通じて指導的位置を保つ海外地理

書」であったことから、⁽²⁾ このようなインディアン像が、その後の日本人のインディアン像の原型となったといえることができる。

如見より5年遅れて、正徳三（1713）年に刊行された新井白石の『采覧異言』5巻や、その2年後に出された同『西洋紀聞』3巻は、情報源は主にイタリア人宣教師シドッチの審問によってはいるが、米大陸の住民についての記述は如見のものと大きな違いはない。前者には、「其人長八尺、故謂長人国」「人不作房室。開地為穴以居。好食人間」、「人与禽獸。相食其肉」とある。⁽³⁾ 後者には、北米のノーワフランスについて述べたところに「按ずるに、此方の地、極めて濶く、其俗木石と共に居り、鳥獸と共に群す」とある。⁽⁴⁾ ただし『西洋紀聞』の方は、「キリシタン関係の記事を多量にふくむため『采覧異言』とは異って厳秘に附され、一部の学者の間でひそかに謄写され尊重されたが、ひろく一般人の眼にふれることがなかった」ので、如見ほど影響力はなかったと思われる。⁽⁵⁾

18世紀後半、天明二（1782）年に出た志筑忠次郎の『萬国管闡』にも、南米でのオランダ人の見聞として如見の前述のものと似たような記述がみられる。「人皆土中ニ穴居ス。……其人身ノ丈一丈余。常ニ人ヲ取テ喰フ」 またメキシコでは「此国ノ人皆裸ニシテ、只前ヲ掩フノミ。……其髮耳マデニ切り、髭ヲ抜キ齒ヲ黒ク染ム。……女子己ニ人ニ嫁シテハ、只腰ヲ掩フノミ。……此外ノアリサマ、更ニ禽獸ニ異ナラズ」とある。志筑は前置に「此段ハ、一五二一年ノ記ヲ取りテ記ス所也」と依拠した史料が古いことを断わっているが、情報源が異なるにせよ、如見と同様ヨーロッパ的な偏見に基づく記述をそのまま邦訳した点では変りはなく、「禽獸ニ異ナラヌ」人喰い人種のイメージが繰返し提供されている。⁽⁶⁾

18世紀末から19世紀初頭にかけては、とくに北からのロシアの圧力に眼が向けられていたが、1830年代以降、モリソン号事件や阿片戦争、そして英米艦船の再三の接近など、にわかに西欧列強や米国の軍事的圧力が身近に感ぜられるようになると、欧米諸国の現勢についてのより正確な知識が強く求められるようになった。弘化二（1845）年に刊行された箕作省吾『坤輿図説』は、こうした必要に応じた省吾の「焦思深慮」の産物であった。

とくに18世紀後半までほとんどその存在さえ意識されなかった米国に注目し、

省吾は「共和政治州」という適切な呼び名を案出し、簡潔ながらかなり正確な情報を提供している。彼は天保六（1835）年の統計を用いて米国の「人口千四百二十四万、軍人八十万、戦艦大小八十一」と記し、「其制度刑政、及ビ国ノ大事ハ、各国共和シテ、其時宜ニ従フ」と述べている。さらに原住民について、「インチアノネン、此称ハ、北亜墨利加ニ住スル人種十四ノ総名ニシテ、其風俗人物各国一ナラズ」として部族毎の多様性をまず認め、3つの部族について次のように記している。「其最モ北地、亜墨利加魯西亜ニ住スル種ヲ、“シャウヲ”ト云フ。身材短小ニシテ、欺詐妄言ヲ慚トセズ。其人常ニ、村落ヲ為サズ、便ニ従ッテ流徒ス。其風俗、相互ニ貨物ヲ窩盗ス。又漁獵ヲ生トス」と。“シャウヲ”を解読できないが、北西部太平洋岸からアラスカ（当時ロシア領）の部族を指しているのであろう。後述する漂流者重吉の見聞とある点で符合するのは興味深い。次に「其ミスシッピ河近傍ニ“イロセイ”種アリ。他種最モ之ヲ重ンズ。其人強壯、其近隣ヲ服従ス。今共和政治州ニ入ル」とあるのは、イロコイ族のことであろう。さらに「又“シロウキス”種アリ。花地^{フロリダ}近傍ニ住ス。天資狼戾ニシテ、且ツ懶惰、仁義礼讓、何物タルヲ知ラズ。殆ンド獸畜ニ殊ナルコトナシト云ヘリ」とあるのは、住地は異なるが“シロウキス”Sioux つまりスー族を指しているのであろう。⁽⁷⁾

このように省吾は北米インディアンが多様性に着目し記述した点では類書より一歩先んじてはいるが、「欺詐妄言ヲ慚トセズ」とか「天資狼戾ニシテ……殆ンド獸畜ニ殊ナルコトナシ」というようなヨーロッパ的偏見をそのまま受けいれている点で、従来のインディアン観から一歩も出ていない。彼は別の所で、サント・ドミンゴにおける「トウサイント」つまりトゥサン・ルベルテュールの独立運動に詳しくふれて、トゥサンを黒人指導者とはみていない事実誤認のゆえか、「吾師ヲ興シテヨリ今ニ二十五年、不羈独立タルハ人皆之ヲ知ル。吾何ゾ碌々トシテ、膝ヲ仏国ニ屈センヤ」と旧宗主国フランスに対する彼の「不羈独立」の気概を述べている点が眼をひく。これは折から、阿片戦争による中国への侵略を眼のあたりにした省吾自身の欧米列強に対する気概でもあったろう。このように本書は、たんに正確な情報を伝えようとしただけでなく、「不羈独立」の気概にも貫かれていた。「鍋島斉正や井伊直弼らが本書を読んで外交の指針としたり、吉田松陰や桂太郎が本書によって大志を立てた」のもこの気概に打たれてのことであろう。⁽⁸⁾ただ、省吾がこの「不羈独立」の精神を見出したのは、黒人でないと思認したトゥサンや、ワシ

ントンやボリヴァルなど白人の英傑のなかにのみであって、同じように欧米植民勢力からの「不羈独立」や自由を求めて戦った黒人やインディアンなどは、彼の眼中になかったといえよう。

2. 漂流者の見聞

鎖国下の日本にあつて、外国書や外国人の訪問記録以外に海外知識の情報源となつたのは、漂流者の見聞録であつた。鎖国政策が厳しくなる直前の応長十八(1613)年には、伊達政宗の使者支倉常長が太平洋を横断して、当時ノヴィスパニアと呼ばれたメキシコのアカプルコに上陸し、メキシコを横断してベラクルスに出てローマに向つた例がある。その際常長はメキシコの原住民と接する機会は当然あつたと思われるが、帰国した1620年までの間に幕府の政策は一変して厳重となり、豊富な海外体験を記録にとどめることなく、彼は「消息を絶っている」ので、何も伝っていない。⁽⁹⁾

インディアンを直接に見聞した記録として伝えられている最古のものは、督乗丸船頭重吉の口述書であろう。彼は1813年に遭難してカリフォルニアのサンタバーバラ沖を漂流中にイギリス船に救助されて、ノヴィスパニアに上陸しそのあとロシア船に移されて北米大陸西海岸を北上し、アムシトカ、カムチャッカを経て帰国した。帰国後重吉は、北米大陸西海岸のルキン(不詳)に寄港した折に見聞したこととして「このわたりに住む異人は、皆穴の中にすまいするなり。その穴居は所々に見えたり。男女とも赤はだかにて、下の帯もなし。魚を生にて食う。親子兄弟の差別なしとぞ。人には、なんの妨げもせぬよし」と述べている。そのあと一日本人に逢つた次第を述べ、さらに北上して当時ロシア領に属する「ノージ、インデン両国(不詳)」に至り、この二国は「人気至つて強剛にして、人を食う国なり。船の通うを見れば出て乱暴をして積たる荷物を奪いなどする事あり……。異人の風俗あくまで荒く強くして、今に於てオロシアの国の風には移らず、髪をたらし、顔は紅がらよりの物にて赤くぬり、手に幾つもの輪をはめているなり……。海獣を捕えて皮をはぎ、近国へ持ち出し、酒又は塩硝などと交易す」と述べている。⁽¹⁰⁾

ここには重吉自らが見たことと、多分外国人船員などから聞いたことの双方が入り交っているが、日本の庶民が直接見聞した史料として、これはきわめて貴重であ

る。「ノージ、インデン両国」は不詳であるが、「その人気至って強剛にして、人を食う国なり」など紋切り型のインディアン像が述べられている一方、その生活や風俗について素直な観察が下されている。このような漂流者の聞書は、1860年の遣米使節の副使村垣淡路守範正の『遣米使日記』に「海外の事情は、たまに漂流人の話を聞書したるものを見るばかりであった」と述べられているように、当時の重要な情報源の一つになっていた。⁽¹¹⁾ 次に天保三(1832)年に遠州灘で遭難し14か月余の後、ワシントン州フラッター岬付近で現地のインディアンに救助された宝順丸の3人の水夫、音吉、久吉、岩吉(松)の場合、数か月間インディアンの間で多分奴隷として生活したはずであるが、その記録は残されていない。彼らは1837年にモリソン号で帰国を試みたが果せず、生涯を異郷で送ることになった。⁽¹²⁾

これとは逆に、1848年に米捕鯨船で日本海に至り、単身で焼尻島、利尻島に上陸したラナルド・マクドナルドは、スコットランド人を父としチヌーク族インディアンを母とする混血青年であった。彼は捕えられて長崎に送られ、座敷牢に閉じ込められたが、そこでの半年間、長崎の通詞たち14名に英語を教えた。マクドナルド自身、インディアンとは名乗らず、彼に接した日本人も彼をインディアンとは思わなかったのも、直接の接触とはいえない。⁽¹³⁾

船頭重吉と同様に、漂流中に外国船に救助されて米大陸に上陸した人は、記録に残された人だけでも幾人かいる。なかでも有名なのは中浜(ジョン)萬次郎と浜田(ジョセフ)彦蔵の2人である。『萬次郎漂流記』にはインディアンに関する記述が見当たらないが、1863年の『彦蔵漂流記』には「漂流記余話」として次のような言及がある。ワシントンの指導でアメリカが独立国となったと述べたあと、「其故ハ英人來り住まぬ前より土人有て、是を“インデン”といふ。其性豪強なれども、智恵少なく、英人の為に圧せられども、ややもすれば豪勢無法の働きをなして英人をなやます。是によって英王、亜米利加居住の英人を選んで大将となし、“インデン”の乱暴を防ぐ。“ワシントン”其將の屯人なり」⁽¹⁴⁾ これは彦蔵自身が滞米中に習得した知識の一部であって、白人側のインディアン観を示す一例といえる。

一方、嘉永二(1849)年の『漂流船聴書』がある。これは漂流中米捕鯨船に救助されてそのまま北極海と思われるところまで行き、エスキモー族の国らしきところを見聞した記録である。ここには「世界之北成氷海ト申所へ参り、此所夜国と申候国有、此国は草木芻葉も無く、皆賤にて岩穴を作り、住居致し居候。此国之人の

様子ハ男女とも皆皮の衣裳ニて、日本の犬の皮の様ニて……毛之処を内外ニして、二枚合、前後共縫、頭より着込候。女ハ目之下よりほうへ懸けて三すじ宛、入墨有之、若年の女ハ入墨無之候。……男之髪は真中と前とをすり、釜之ゑんのよふニ残し有之候』と述べられている。⁽⁴⁵⁾

以上の例に見られるように、漂流者自身が北米大陸太平洋岸などの原住民と直接に接触し、その見聞を日本に持ち帰る機会は時折あった。彼らは漂流した上、異国船に救われて異国をめぐるという異常な体験をした割には、かなり冷静に自らの眼で北米原住民を観察し、その異様さに驚きながらも、同じ人間であるという視点は失っていない。それは、漂流者たちがもともと庶民であって、支配階級である武士や学者の大半が抱いていた夷狄観や、下層民に対する身分的偏見から比較的免がれていたことによると思われる。もちろん、洋書からの知識がヨーロッパ的偏見から自由でなかったのと同様、彼らの見聞も、日本人一般がもつ文明観や宗教観に基づく偏見から必ずしも自由でなかったことはいうまでもないが。

3. ベリー来航の衝撃

1853年のベリーの来航は、鎖国政策によって支えられてきた徳川幕藩体制を根底から揺がした。幕藩体制の維持をはかる人も、倒幕を志す人も、広くは世界情勢について、当面は米国について、より詳しい知識を早急に必要とした。箕作省吾の『坤輿図識』は簡略にすぎてこの需要に十分に応じ切れなかった。より豊富な情報源は、魏源編『海国図志』に求められた。1842年阿片戦争の敗北の年に中国で刊行されたこの書物は、1852年に15部日本に輸入され、1854年にはその「亜米利加洲部」が急拠和訳され出版された。中山傳右衛門『海国図志墨利加洲部』8巻6冊、広瀬達『亜米利加総記』1巻1冊、同『続亜米利加総記』2巻2冊、正木篤『美里哥国総記和解』上中下3冊などがそれで、アメリカ合衆国の歴史、地誌のみならず、政治制度、産業、人口統計(1830年代の)、生活習慣などがかなり詳細に記述されている。インディアンに関しては「^{インディア}因底阿ノ土人種類至テ多シ。度々ノ戦争ニ因リテ殺サルモノ過半ナリ。タタミスシッピノ東ニ因底阿ノ土人八万人アリ。西ニ十八万人アリ。ソノ餘ハ各部落ノ中ニ散居ス。折りニハ自ラ小村落ヲ成シ、或ハ穴居シ、或ハ木ニ巢ヒテ、殆ンド鳥獸ニ同ジ。病氣ノ時ハ巫師ヲ倩フテ歌舞ヲナ

シ、血ヲ刺シテ誦呪ス。又ハ自ラ草木ヲ取り用ヒテ薬トナス。ソノ風俗鬼神ヲ信ジ、戦闘ヲ好ム。陣ニ臨メバ符呪ヲ佩フ。ソノ内獵ナル者ハ人肉ヲ食フ。尤モ犬肉ヲ嗜ム。其頭目ノ衣服ハ牛皮ヲ用ヒ、羽毛ヲ以テ頸ニ熊ノ爪ヲ掛ケ、足ニ白皮ノ靴ヲハキ、手ニ羽扇ヲ持ツ……」とある（正木版）。また「土人ト曰フ。乃チ原始ニ駐ル所ノ者。……土民田ヲ耕スヲ知ラス。但游獵ヲ知ル。……顔状慈善。性情敦讓。但毫モ字ヲ識ラズ。又農ヲ知ラス。惟々天生地産ヲ待ツ」とも述べている（中山版）⁽¹⁶⁾。

このようにインディアンを「殆ンド鳥獸ニ同ジ」野蛮人と見る点では従来と変わりはない。ただ、その人口分布など最新の情報を紹介し、さらに連邦政府のインディアン文明化政策にふれ「近頃漸ク教化ヲ以テソノ党与ヲ招キ来シ、夫レゾレ房室又ハ耕織ノ道具ヲ供シ、コンシュルノ役ヲ設ケ之ヲ治ム。……師ヲ招キテ土人ヲ教導ス。天保六年、書館ニ在テ学業ヲ習フ童子既ニ千五百人アル」と述べてはいるが、インディアン自身の文化創造能力については否定的見解に立っている。例えばミシシッピ川流域平野にある数多くのマウンド（埋葬塚）について、「或ハ謂フ。因底阿土人造クル所ノ墳墓ナリト。然シナガラ土蛮ノ頑愚ニテ何如ン造作スルコトヲ解センヤ。或ハ謂フ。洪水泛濫シテ波浪ノ激シ成ス者ト。此説是ニ近シ」（正木版）と述べている。実際にはこの「墳墓」はインディアンが紀元前1000年以来築いてきた文化——アデナ文化、ホープウェル文化、ミシシッピ文化——の遺跡にほかならなかったのであるが、「土蛮ノ頑愚」とみなす偏見から、白人は容易にインディアンの「造クル所ノ墳墓」と認めることができなかったのである。そして『海国図志』の編者も、その和訳者もまた、それぞれのもつ独自の夷狄観から、それにいとも容易に同調したと見られる。

こうしてペリーの来航を引金にして多数出版された『海国図志』和訳本によって、海外知識は一般に近づき易いものとなり、また洋学者のみならず漢学者も和訳の仕事を通して「国事に馳せ参ずる」機会ができたが、このような情報量の増加にもかかわらず、旧来からの「土蛮ノ頑愚」の固定観念は変更や修正を迫られることなく相変らず持続された。

『海国図志』の和訳本に圧倒されたためか、1850年代の半ばには、欧米事情に関する洋書の翻訳書の刊行は、箕作阮甫のものを除くと割と少ない。そのうちオランダ人カラーメル原著の世界地理書の米国に関する部分の翻訳書として、小関高彦訳『新釈合衆国小誌』2巻2冊、1855や無名氏記述『米利堅新志』1855をあ

げることができる。前者のなかには米国史に関して次のような簡単な叙述があり、インディアンと白人の關係にふれている。「歐羅巴ヨリ移居スルハ千六百年代ヨリ始マレルコトニシテ、其土人ナル因底阿人ハ、漸々ミシシッピ河の西方ニ逐ヒ却ケラレタレバ、目今合衆国ノ土民ハ、皆ヨーロッパ人若クハヨーロッパ人ノ末裔ナルコト明ナリ」さらに「因底阿人ノ合衆国ニ在ル者、近今ノ算定ニヨレバ、三十三萬二千四百九十八人ニ過ギズ。其東辺ニ住セシ因底阿人ノ種属、近今滅絶セル者亦少カラズ」と19世紀中葉のインディアンの現状が紹介されている。¹⁷⁾

4. 萬延元年の遣米使節と福沢諭吉『西洋事情』

萬延元年(1860)に新見豊前守正興を正使とする遣米使節が出発する直前の1850年代後半には、以上見てきたような米国情報がすでにしまわっていたはずである。しかし使節団の一行の大半が、これらの予備知識を十分に吸収して米国に赴いたかどうか、はなはだ疑わしい。第一、ポーハタン号の出帆日限を米国公使ハリスが幕府に通告し、使節一行の人員を訊したのが1859年10月4日であり、米国差遣の正使、副使、目付の任命が10月7日、威臨丸で軍艦奉行木村喜毅以下の米国渡航を命じたのが12月16日、そして威臨丸の出帆が1860年2月9日、ポーハタン号の出帆が2月11日というあわただしい日程であったから、その間に唐突に使節団の一行に加えられた多くの人は、予備知識を仕込む暇さえなかったにちがいない。もちろん玉虫諠茂など平常から関心をもち情報を収集していた人もいたが、一行の大半は副使村垣のように「たまに漂流人の聞書」を見るだけで、十分な予備知識をもたずに渡米したと思われる。ということは、彼らは当時の日本の「常識」を唯一の物差しとして、米国や世界を観察し評価し記録したということである。その顕著な例が、一行がこの旅先で出会った世界のさまざまな人種・民族についての記述である。ここではそのうちパナマの原住民と米国東部の黒人についての記述に検討を加えよう。

まずパナマの原住民に遣米使節一行が出会ったのは、1860年4月25日の朝パナマ港から上陸して蒸気車に乗りかえ、アスピンウォールに着くまでのほんの2〜3時間、多分車窓からの観察にすぎないが、4人の記録がある。福島義信は「土人面色暗黒、髪更ニ長スルコトナク、多ハ裸体ニシテ、唯風呂敷様ノ物ヲ持テ僅ニ腰

ヲ覆フノミ也」(『花旗航海日誌』)と述べ、加藤素毛は「道筋人家あり、皆黒種にて面相甚あしく、……且にハ人口すくなし、いまた人倫の道備へらず」(『二夜語』)と述べ、野々村忠実「人物色黒キコト墨ヲ塗りタル如ク、頭髮黒ク縮ミ、丈ケ高く、鼻獅々ニ似タリ、唇アツク、卑賤ハ跣足、軍卒ハ米人ニ似タリ、土民ハサントウイス(ハワイ人)ニ似タリ。……土人多ク痘ヲ悪ム、故ニ如シ痘ヲ病ハ、島ニ病院有テ是ニ放ツ、市中ノ富饒ナル者ハ皆米英諸国ノ人多ク、土人ハ多ク其役徒トナル」(『航海日録』巻一)と述べ、⁽¹⁸⁾ さらに村垣淡路守は「耕作しているようすなどは少しもない。五町十町をへだてて土人の小屋があり、ヤシの葉で屋根を造り、わが蝦夷の家屋に等しい。土人は男女とも黒色はなはだしく、ヨーロッパ風だが、きわめてそまつである」(『遣米使日記』川村善二郎訳)と述べている。⁽¹⁹⁾

このパナマ人が、原住民インディオなのか、アフリカ系の黒人なのか、両者の混血なのか分らないが、野々村がいうように金持の米英人に使役される「役徒」になっている様が見える。とりわけ、村垣が「土人の小屋」が「わが蝦夷の家屋に等しい」と「蝦夷」を連想しているのは興味深い。村垣は、松前・蝦夷御用や箱館奉行をつとめた経験からか、蝦夷ないし蝦夷人の比喻を彼の『日記』の中で粗末さや貧しさの形容詞的用法として再三使用しているが、ここでもパナマ人の家の粗末な構えをみてアイヌ人の家をとっさに思い出したのであろう。村垣自身が、パナマ人とアイヌ人の被征服民族としての共通の運命に思いいたったとは到底思えないが、興味深い連想ということではきよう。

次に訪れた米国東部社会で、一行の大半は黒人とインディアンとの区別さえつかなかった。『海国図志』などを読んでいた玉虫誼次でさえ次のように述べている。「国中黒人六分ノ一ニ居ル。……是皆政事ニ預ルコトヲ許サズ、或ハ白人ノ奴僕トシ、或ハ汚穢ノコトヲ司ラシム。然レドモ黒人ハ花旗国(米国)ノ本種ニシテ、白人ハ英国ノ人種ナリ、客却テ主トナルハ悲シムベキニ似タリ。然レドモ賢愚ノ違ヒ止ムヲ得ザルナリ。然ラバ人種ニ因テ化スベカラザルモノアリト見ユ」(『航海日録』)⁽²⁰⁾ 彼はここで「黒人ハ花旗国ノ本種」つまり原住民であるとし、本来の「本種」であるインディアンと混同してしまっている。しかしそれ以上に問題なのは、南北戦争の寸前に米国社会を訪れた一行が、当時の政治上の最大の争点であった黒人奴隷制度に対してとった態度である。

玉虫は「賢愚ノ違ヒ止ムヲ得ザルナリ」とし、野々村忠実「黒人ハ人質悪ク愚

ナリ」「白人ト隔ヲナシ、富貴ノ者ナク、只白人ノ奴婢トナル」（『航海日録』）と述べ、目付小栗忠順の従者木村鉄太は「国ノ制黒人ノ人ヲ別フ。我屠児ノ如シ。然レ庄、之ヲ奴婢トシテ使フ。白人固ヨリ知慧。黒人ハ愚昧。故ニ知愚ノ種ヲ混ゼザラシム」（『航米記』）と述べ、いずれも「賢愚」の違いから生じた、やむをえないあるいは当然の制度として、黒人奴隷制度を認めているのである。村垣に至っては、全く一行も言及していない。⁽²¹⁾

村垣のように高官でも高齢でもなく、低身で若年の従者福島義員は、米国人の平等な社会関係に感心して「此国ハ高官ノ者ト雖、猥ニ下人ヲ侮リ、或ハ己カ權威ヲ振フコトナシ。夫故平人常ニ高官ニ諂フコトナクシテ、国富、民泰ニ、枕ヲ泰山ノ安ニ置ク」と述べているが、その福島でさえ「此地ノ土人ヲ黒人トス。其質極メテ暗愚ナリ。皆白衣ノ奴僕トナリ、一家ヲ保ツモノナシ」と白人による黒人の差別と奴隷制度を「暗愚」という理由で正当化し認めてしまっているのである。⁽²²⁾ 従者である木村も奴隷制度を「我屠児ノ如シ」と述べ、屠児つまり家畜の皮や肉を扱う人＝賤民と同様のものとみなし、「国ノ制」として認めているのである。

このように、白人を紅毛の夷人として排斥する夷狄観に比較的無縁であったかに思われる福島らでさえ、こと人種問題に関する限り、一様に人種差別制度や黒人奴隷制度を、既存秩序の一部として容易に受け入れてしまっているのである。彼らにとって、彼ら自身が原住民と同様にヨーロッパ人に侵略され征服され支配されて「客却テ主トナル」日がくるかもしれない、などとは思ひもよらなかったようである。それは、国内で彼らが「蝦夷」や「屠児」の立場におかれるなどとは夢想もしなかったことと同様である。むしろ彼らは、黒人やインディアンを差別し支配する白人の側に、無意識のうちに身をすり寄せていたと見ることができよう。

この遣米使節の一行に、咸臨丸の木村軍艦奉行の従僕として加わった福沢諭吉は、翌年の文久元年の遣欧使節の一行に正式の随員として加わり、通訳と西洋事情の「探索」の任務を与えられた経験を加えて、「到る処に筆記して帰来、これを取纏め又横文の諸書を参考にして」1866年に『西洋事情』初編を著述し刊行した。⁽²³⁾ それは福沢の二度の海外経験と旺盛な洋書からの知識の吸収に基づいた帰朝報告書であったが、同時に幕末期の日本における海外知識の集大成でもあった。

その巻之二 亜米利加合衆国 史記 の項で、彼は合衆国の独立の歴史を簡潔に

述べ、一個所インディアンにふれて「此外垂米利加の土人と戦ふこと二度にして、アルカンサス、ミチカンの二州を合衆国に併せり」と述べ、割注として次のように説明している。

「土人とは本来の垂米利加人種なり。閣立（コロンブス）此国を発見して後、欧羅巴諸邦の人ここに移住するに及て、終始土人と和せず動もすれば戦闘を起すと雖ども、従来此土人は風俗野陋唯強勇なるのみにて、文学技術を知らず、固より欧羅巴人に敵すること能わず、合衆国独立してより以後、尚ほ又擯斥されて山野に遁れ、漁獵を以て業となし、絶て海岸の地に出ることを得ず、時々党を結て山より出で、合衆国内地を侵すことありと云ふ」と。

このように福沢は、遣米使節の一行とは異なり、土人＝インディアンを黒人とははっきり区別し、「此土人は風俗野陋唯強勇なるのみにて、文学技術を知らず、固より欧羅巴人に敵すること能わず」として、西川如見や新井白石以来の「獐惡」で「天資狼戾」なインディアン観を「野陋」という表現で受け継いでいる一方で、ヨーロッパ人と「土人」の歴史的な関係を現状に至るまで大まかに辿っている。しかし、別の個所で彼が黒人奴隷制度に対して、「黒奴と雖も同一の人類なるに、之を牛馬の如く仕役して、人の人たる通義を許さざるは天理に戻る」とする「北部の正論」を紹介して、はっきりと批判的態度をとっているのに比べると、白人によるインディアンの征服や「擯斥」に対して、批判的な姿勢をなんら打ち出していない。福沢が、この白人と「土人」の関係を、欧米列強と世界各地の諸民族との支配従属の関係のなかで批判的に見直して位置づけ、一つの「文明論」として提示するまでには、彼自身も明治維新の試煉をくぐりぬけなければならなかったのである。

注

- (1) 西川如見遺書第四編『増補華夷通商考』全五巻、明治32年、西川忠亮編、東京印刷株式会社、明治32年刊。（立教大学図書館大久保文庫所蔵、以下大久保庫と略す）
- (2) 開国百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の海外知識』東洋文庫、昭和28年刊、覆刻版、1978年、原書房、p. 17。（以下『日本人の海外知識』と略す）
- (3) 新井白石『采覧異言』（写）（大久保文庫）
- (4) 新井白石『西洋紀聞』（写）（大久保文庫）

- (5) 新井白石『西洋紀聞』東洋文庫113，平凡社，1968，宮崎道生「解説」
p. 419.
- (6) 志筑忠次郎『萬国管闕』乾坤，1794（大久保文庫）
- (7) 箕作省吾『坤輿図識』巻一～巻四 1845-47（大久保文庫）
- (8) 『日本人の海外知識』pp. 175～178.
- (9) 高橋富雄「慶長遣欧使節」，同編『伊達政宗のすべて』新人物往来社，1984，
pp. 164～181.
- (10) 「督乗丸船長日記」石井研堂編『異国漂流奇譚集』新人物往来社，1971，pp.
99～187.
- (11) 村垣淡路守，川村善二郎訳「遣米使日記」『世界ノンフィクション全集』14，
筑摩書房，1961，pp. 188～189.
- (12) 春名徹『につぼん音吉漂流記』晶文社，1979.
- (13) 拙稿「幕末期の漂流者ラナルド・マクドナルドと音吉」『歴史公論』1979年
6月，7月号。
拙訳『マクドナルド＜日本回想記＞』刀水書房，1979.
- (14) 荒川秀俊編『近世漂流記集』法政大学出版部，1969，pp. 270－271. 及び
石井研堂，前掲書，pp. 337～338.
- (15) 「漂流船聴書」荒川，前掲書，pp. 218－232.
- (16) 中山傳右衛門『海国図志墨利加洲部』8巻6冊，広瀬竹庵訳『亜米利加総記』
1巻1冊，正木篤和解『美理哥国総記和解』上中下（いずれも大久保文庫）
- (17) 和蘭人葛拉墨兒原撰，小関高彦訳『新訳合衆国小誌』，1855，無名氏記述『米
利堅新志』1855（いずれも大久保文庫）
- (18) 日米修好通商百年記念行事運営会編纂『万延元年遣米使節史料集成』第3巻に
福島義員『花旗航海日録』，加藤素毛『二話語』，野々村忠実『航海日録』が収
録されている。
- (19) 村垣淡路守，前掲書，pp. 207－208.
- (20) 玉虫誼茂『航米日録』，マサオ・ミヨシ著，佳知晃子監訳『我ら見しまに』
平凡社，1984，p. 95より引用。
- (21) ミヨシ，前掲書，p. 94，村垣，前掲書。
- (22) 福島義員『花旗航海日誌』

- (23) 『西洋事情』初編，『福沢諭吉全集』第一卷，国民図書株式会社，1926，
『西洋事情』外編，同上書。